

「なかむら てつ」国内の診療所勤務を経て、1984年、パキスタンの都市ペシャワールに赴任。以来、ハンセン病を中心に貧しいひとびとの診療に携わり、その後アフガニスタンにも診療の範囲を拡大。今回のテロ事件に際しては、衆議院テロ対策特別委員会でも参考人として発言。帰国すれば講演、取材と多忙を極めているが、「現地のことを少しでも知ってほしい」と奔走中。

「落合恵子緊急インタビュー」

The Other Side of the World 中村哲さん(アフガニスタン 医療活動17年)に聞く。 テレビ報道では見えない アフガニスタンの真実

朗報として「アフガニスタン解放！」はわたしたちに報道されました。着用を義務づけられていた民族衣装・ブルカを脱いでよるこぶ女性たちの映像に「よかった」と思いそうにもなりました。でも…どうもひっかかる何かを、医師・中村哲さんに落合恵子が伺います。ニュースとの違いに驚くかもしれませんが、ここにひとつの真実が見えてきます。もちろん、状況は刻々と変わっていますが……。

わたしたちの情報は アメリカ製

落合 9月11日から、わたしたちが受け取る情報は、ほぼアメリカ発のそれです。現実にはアフガニスタンで暮らしているひとびとの日常的な声や切実な思いはほとんど伝わらないという状況にあるなかで、いま、中村さんがわたしたちにメッセージされたいことからお願いします。

中村 日本に帰ってくる、「アフガニスタンは解放された、自由だ」という雰囲気ですが、実際は、いまアフガニスタン全土で治安が非常に悪化しているということを、まず知ってほしいですね。現地では、冬を前に餓死者が相当数出るだろうと言われていますが、治安の悪化のため、わたしたちだけでなく、さまざまな救援活動が非常に困難な状況に直面しています。

落合 そのようなニュースがなぜわたしたちの手に届かないのでしょうか？

中村 「正義と自由の民主主義対、悪の権化タリバン」という対決図式のなかですべてが行われていて、日本人もそれにだまされてきたというのが現実だと思います。タリバン政権の功罪について、罪ばかりが言われ、功はあまり報道されません。わたしはタリバン政権の以前からアフガニスタンにいますから、さまざまな権力の変遷を見てきましたが、そのなかでもタリバンは比較的まともな政権でした。92年に共産

政権が倒れた後、現在の北首同盟が首都カブールに押し寄せ、そこで行われた市街戦、レイプ、略奪……わずかに3、4年の間に、カブール市民だけで2〜5万人のひとがそこで犠牲になり死亡したと言われてます。ですから、おおかたの市民は、タリバンが来たとき、ほっとしたのが事実です。

「下から見える光景」と「上から覗く光景」は違うのです。貧しいひとたちと関わる人が多いわたしたちは、下から見える光景を見ていると思うのですが、今回のことに関しては、アフガン人でも、たとえば国連の職員、欧米のNGOに雇われたひとなど、英語を流暢に話し、社会的に身分の高い、アフガン人とはいえないくらいメンタリティがウエスタナイズされたひとたちが上から覗いた光景が大きく伝えられ



た」というのがわたしの印象です。

落合 ブルカにしてもそうかもしれませぬね。「ウエスタナイズ」と言われてしまいかも知れませんが、わたしは個人的に、ある民族を象徴する服装をいつも女性がしていかなければならない、ということには違和感をもちます。ただ今回のニュースの流され方はずいぶん偏りすぎているですね。タリバン政権がいかに差別的であるかを示すためか、タリバンと共にブルカをかぶる習慣ができたようなニュアンスの報道がされていますが？

中村 いいえ、あれは何世紀も前から風習です。一種の女性の外出着ですからパキスタンでもみんなかぶってます。タリバン政権は簡単に言うところや遊牧民など「田舎もの」の政権です。だから、ブルカのことをはじめ、慣習法を布告としてすすめた。それを都市のひとびとに強要したことに問題はあるにしても、ほとんどのひとたちには抵抗がなかったんですね。日本人に「3回の食事のうち1回は米の飯を食え」と言うような布告に近いのです。

落合 タリバンの後退を市民がよろこぶシーンがテレビで流れますが、あれはどう考えたらいいのですか？

中村 あれも作為的な編集だと思えます。傑作なのが、「バザールにテレビが売り出されました」といった「解放にわき返るひとびと」の報道です。わたしは今年の3月からカブールに出たり入ったりしていますが、あれは日常

的な光景です。レゴもの光景も、説明の仕方でも変わるものかと。

普通の市民は、権力がどうあろうと自分たちの平和な生活が守られればそれでいいわけです。旗を何枚か用意して、タリバンが来ればタリバンの旗を振る、北部同盟が来れば北部同盟の旗を振る……これは当然です。70年ほど前、日本が中国に進駐したとき、南京などの市民が日の丸をもって歓迎せざるを得なかったのと同じですよ。

落合 生き延びるためのひとつの、哀しい対応の仕方ですよ。

中村 そうです。一方で、カブールで北部同盟によるパシュトゥン人の虐殺があったことなど少しも報道されませぬよ。パシュトゥン人はタリバンの主な構成人で、タリバンの協力者とみなされるのです。わたしたちのスタッフのなかのパシュトゥン人も危機一髪で避難させました。確かに路上で虐殺があつて、そこには兵士だけでなく女性や子どもの姿もあつたといえます。

アフガニスタンでは「ジルガ」という地域の長老会が基盤で、ある権力が来ると、各地域のジルガがそれを受け入れるか、戦うかを決めます。タリバンは、各ジルガに「平和と秩序を守る限りで」と受け入れられていったというのが真相です。そうでなければ、ソ連軍10万人でもコントロールできないから、5千人でコントロールできるわけがありません。もちろん荒唐無稽な布告も



ありましたが、おおむね、市民はこの数年間、干ばつやマラリア流行はありましたが、少なくとも平和な生活が送れるという点では、いままでとは別世界を経験していたのです。

くり返される 「西部劇」

落合 それが全部ひっくり返った…。

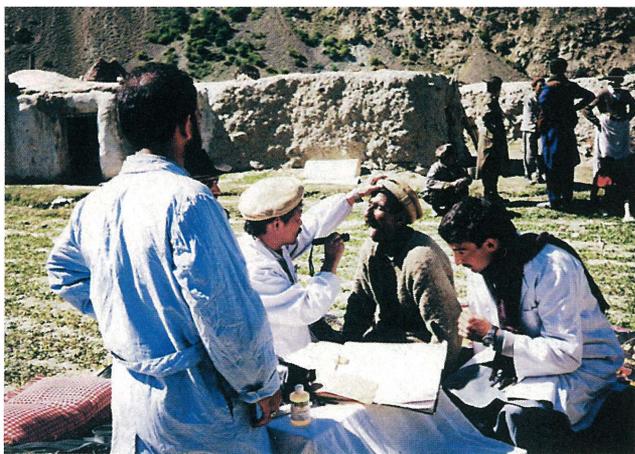
中村 そうです。現地にいた国連職員などはこのような事態を把握していたはず。そして国連には当然発言権

があつたはずですが、それが受け入れられなかった。わたしはどうもそこに不愉快なものを感じるのです。アフガニスタンの国民の声が意図的に無視されたと思えない。アメリカ人や先進国のひとのいのだが大事で、発展途上国のひとのいのは非常に軽くみられているということですね。

去年の5月の段階ですでに、国連機関が、400万人が飢餓線上に、100万人が餓死線上にあるという警告を発していたのですが、それに対しては

ひとことも反応はなく、仏像破壊などセンセーショナルなトピックスだけが報道されました。あれは干ばつに対するタリバンの雨乞いの儀式で、現地では仏像どころではありませんでした。次々に子どもたちが死ぬ、おかあさんたちが死にかけた子どもを抱いてオロオロしている…：：：そういうことが報道されない背景に、一種の人種差別が、先進国側、欧米側のおごりがあるのではないかと思うのです。簡単に言う

と、これは西部劇ですよ。



アフガニスタン山岳部で診療する中村哲さん。

中村哲さんと ペシャワール会の17年

「ペシャワール会」は、中村哲さんのパキスタン、アフガニスタンでの医療活動を支援するため結成されたNGO。福岡市に事務局をおき、募金活動、ワーカーの現地派遣などを行っています。中村哲さんとペシャワール会のあゆみを見ていくと、テロと戦争の背景が見えてきます。

1986年 アフガニスタン難民のため

落合 わたしは今回のことに関して

ネイティブアメリカンのことを思わずにはいられません。昔、現在はアメリカと呼ばれている大陸で自分たちの生活と文化をしっかりと重ねていたネイティブアメリカンがいた。彼らを、メイフラワー号に乗ってやって来た白人たちがアメとムチで侵略をすすめ、自分たちの支配下に置く。うまくいかないと、「あの困った『インディアン』たち」と彼らを敵にして。それが物語や映画になって白人の正義を広げていった……あのやり方と非常に似ているような気がしますね。

中村 その延長そのものですね。白人ひとりがやられると、針で刺されても飛びあがるけれど、それが他人の、人間とみなされていないひとびとのからだならば槍についても平気なのです。

落合 ベトナム戦争も、ある種の人種差別、「黄色いやつら」というかたちの白人中心主義からはじまった一面があると思うのですが、それをまたくり返している。悲しいことに、そのときにも日本は関与していました。今回もわたしたちの首相は「後方支援」という名前のもとに自衛隊を出した……。

中村 これまでアフガン人はとても親日的で、国連の旗をつけた物資輸送車はだめでも、日本の車は襲撃されませんでした。でも、今回はわたしたちも日の丸を下ろしました。

落合 「シヨー・ザ・フラッグ」が皮肉な結果となりましたね。

いのちを延ばすのが医者ではない

落合 わたしは「あえて〇〇した」か「あえて〇〇しない」人生を送っている方にとっても共感するのですが、中村さんは、日本の医療社会にある階段はある意味ではあえておりられた。そこに迷いはなかったのですか？

中村 なかったですね。やっぱり、よろこばれるところで働くというのは医者冥利に尽きるんですよ。あの地域が気に入っていたこともありまして。良くも悪くも人間がむき出しに見えるところで、いちばん衝撃を受けたのは、ひとびとの「死生観」です。寿命は神が決めると考えていて、生への執着がない。わたしたちはそれを医療設備がないゆえの負け惜しみかあきらめだと考えがちですが、そうではない。いまの日本人には失われた、いのちを尊ぶ感覚のようなものがあるのです。

病院で、患者の家族が「あと何ヶ月もつか正直に言ってください」と聞く。そこで「がんばって数週間だろう」と言うと、さっと家に連れて帰る



ました。昔に日本でも多死多死めのかき止でした。いまはそれが病院になって、家族が見つめているのは心電図です。たしかにあちらでは、日本だったら助かるようなひとでも、経済的な事情から十分な医療を受けられず亡くなっていることがあります。でも、ひとりのひとが生きて死んでいくということが本当に大切にされているという意味では貧しくとも豊かであると思います。

落合 そのひとたちが古来からもつてくる死生観を大事にしつつ、かつ医療というサービスを受けるうえでの不平等は可能な限りなくしていくというのは無理なのでしょうか？

中村 難しいのはたしかですね。相矛盾することですから。どこで妥協するか、バランスが求められますね。

落合 日本のわたしたちにはすでに欧米風の死生観があります。医療の現場でも、主なテーマは「あと何日間のちを延ばせるか」で、その結果患者自身や家族がより苦しむ場合がある……人間というのは「全体」として、「関係」として存在するはずなのに、西洋医学では部位的にしか見られていない側面があると思います。部位は治っても人間としてどうなのかという問いかけが、西洋医学に対する不信感としていま強くなってきた実感があります。中村さんは、いわゆる西洋医学の世界にいながらその限界や矛盾に気づくというのは苦しいことではありませんか？

1991年 アフガニスタン山岳部の無医地区に3つの診療所を建設。

1998年 基地病院としてPMS（ペシャワール会医療サービス）建設。

2000年 アフガニスタンが干ばつに襲われ、井戸と地下水路、計600本の水源確保プロジェクトを開始。

2001年10月「アフガニのちの基金」を設立し、小麦と食用油の配給事業を開始。現在は、パキスタン、アフガニスタンあわせて1病院、10診療所で医療活動を続けている。

写真右上・2000年9月、干ばつで緑のないアフガニスタン、ダラエ・ヌール渓谷。右下・2001年2月、地下水路修復後、畑に緑が戻ったダラエ・ヌール渓谷。上・水路完成をよろこぶ女性たち。

●「アフガニのちの基金」への協力は、口座名義「ペシャワール会」郵便振替番号「017901716559」※通信欄に「アフガニのちの基金」係と明記を。お問い合わせはペシャワール会事務局 TEL 092(731)2372まで。



地雷で足を飛ばされたひとが、両足とも飛ばされていたらもう処置はしません。というのは、山岳地帯では車椅子生活は無理で、そのようなひとがいると経済的に立ち行かず、家族全体が破滅してしまうからです。片足であれば、松葉杖でなんとか生活できるので処置をします。日本でそんなことをすれば告発されますが、医者というのは、ただ単にいのちを延ばせばいいというものではありません。

日本の現代医療では、医者は自分が責められないために「放っておけば死にます。助けると植物状態になります。どちらをとりますか」という質問を家族にする。それは酷なことですよ。家族は「いのちだけは助けて」と言わざるを得ません。人情の機微がわかる医者なら、「助からない可能性が強い

ですが、一生懸命やってみます」と言っただけの反応を見るのです。植物状態でも「このひとのそばにいれば幸せ」というひともいれば、みんな「いのちだけは」と言っておきなから、結局ひとりに負担がかかって家族が壊れることもある…。そのあたりを讀みとって判断することができない医者が増えているのは事実でしょうね。

落合 医療に対する不信感から、わたしは、インフォームド・コンセントやセカンド・オピニオンは必要だと言ってきました。いまでももちろん一方の通路で必要だと思いますが、もう一方で、インフォームド・コンセントを形通りかすれば、もう責任はない、あとは患者やその家族にお任せ、と医者たちが無責任になつていっている部分があるように思うのです。そういう意味でバランスがとて悪い医療が増えてきていると感じます。とは言え、まだまだ、きちんとしたことを伝えたい医師もいて、そこにはインフォームド・コンセントなどを求めなければいけないし…。これも難しいバランスですね。

つからか、道徳的、倫理的な判断をする基準がなくなつてきているのでは、と思えてならないですね。アフガニスタンでは、子どもたちはコーランを学びながら大きくなります。誤解が多いのですが、イスラム教はなにもテロや爆破事件と関係があるわけではありませぬ。子どもたちはそのなかで「ひとが犯してはならないこと」をきちんと学んでいるのですが…そういったものがないの日本にはないように思います。

手術は成功でも、患者は……？

落合 この頃、グローバリゼーションということばがよく言われます。響きよく聞こえますが、言ってみればそれはアメリカナイズすることで、裏側にあるのはアメリカ中心主義だとわたしは思います。それと今回の米中枢へのテロの問題というのは非常に深く関わっていると思うのですが、現地においてお感じになることはありませんか？

中村 とにかく欧米的な文化を採用しないところは遅れている、野蛮なところだと烙印を押して、元来からある慣

習、土地の文化を善悪の尺度で測る…最近これが非常に目立ちますね。自分と同じことをしないと悪いやつだとなつた結果、「解放されて自由になつた」はずのアフガン市民は、実際はどんどん死んでいるのです。医療にたとえると、「手術は成功したけれど患者は死にました」ですよ。

落合 この状況に対して、わたしたちは何からはじめればいいのかでしょうか？
中村 それぞれの立場でできることをすればいいと思いますが、いまの流れに流されず、「本当かな？」と疑う目をもつことがいちばんの基本だと思います。そもそもの発端になつたアフガニスタンの干ばつは地球温暖化のためでもあります。今回のことは、思う以上に深い問題をはらんでいるのですから。



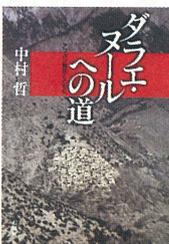
アフガンから世界が見える 中村哲さんの本



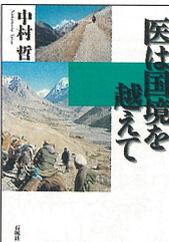
『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房/刊 本体1200円)



『ベシヤワールにて』(らい)としてアフガン難民(石風社/刊 本体1800円)



『ダラエ・ヌールへの道』アフガン難民とともに(石風社/刊 本体2000円)



『医は国境を越えて』(石風社/刊 本体2000円)



『医者井戸を掘る』アフガン旱魃(かんばつ)との闘い(石風社/刊 本体1800円)